

大地の芸術祭をたぞねて 越後妻有アートトリエンナーレ2018

日本有数の豪雪地、越後妻有（新潟県十日町・津南町）を舞台に、3年に一度開催されている世界最大級の国際芸術祭を2日間にわたって鑑賞しました。農業を通して大地とかがわってきた歴史・文化を持ち、日本の原風景とも言うべき豊かな「里山」が残るこの地を、アートを道しるべに巡りました。



大地の芸術祭は東京23区ほどの広さを持つ越後妻有を舞台に、2000年、100点余りの作品からスタートしました。恒久的に展示される作品もありますが、会期ごとに新作も発表され、7回目の今回は378点の作品が公開されています。44の国と地域から参加の335組のアーティストの多くは、実際にこの地を訪れ、現場で制作しています。

私たちの2日間は、話題の新作を中心に、人気の高い過去の作品を、棚田をはじめとする大自然の美しさとともに堪能しました。空家や廃校に展示されている、いわゆるホワイトキューブ（ギャラリーや美術館）では見ることの難しい作品を鑑賞しました。

■越後妻有は、かつての行政区分「越後国」と古い文献に見られるこの地方を指す「妻有庄」からとられた通称。これ以上進めない場所を指す「とどのつまり」が語源ともいわれている。

移動のバスの中で、
沼辺先生と鞍掛先生に
お話しいただきました。

(以下Nは沼辺先生、Kは鞍掛先生)

- N** どうして家を彫ってみようと思われたのですか。
- K** 地域には人の住まなくなった家がたくさんありました。住まなくても雪下ろしをしないと家はつぶれてしまいます。この廃屋を使って何かしたい。一人でするのではなく、学生たちも巻き込んで、多くの人が携わって、地域とコミュニケーションをとりながらできることは何だろうかと考えました。
- N** 「脱皮する家」というタイトルは最初から決めていましたか。
- K** いいえ。プランの段階では「家を彫る」で出していました。彫ることによってたくさんの方が来て、新しく生まれ変わる。彫り手の僕たちも、家も、まさに脱皮している感じだったので、いくつかの案の中から「脱皮する家」となりました。
- N** 家の中全てを彫りあげる、大変な仕事量ですね。
- K** あまり苦労したとか見せたくないのですが、本当に大変でした。とても彫れるような家ではなく、半年間の片付けに始まり、基礎もやり直しました。学生たちとほとんど毎週末通っておおよそ2年間彫り続け、会期初日朝によく彫りあげられました。
- N** 削り取っているようでいながら、苦労を刻み込んだという感じですね。
- K** 時も刻み込みました。初めは地域の人に距離をおかれました。東京から来た変な若者たちが何故か家を彫っていると。挨拶をかわしたり、お手伝いをしたりするうちにお母さんたちがご飯を作ってきてくれるようになって、今ではあたたかく迎え入れてもらっています。
- N** 暮らしたことはないですけど、古い日本の家にいるとほっとしますね。「脱皮する家」は本当に素晴らしいお仕事でした。お疲れ様でした。
- K** 生きて暮らしている生活の場に美術(アート)が下りてくる感覚を大切にしたいです。アートをやりながら棚田も作り続けていくつもりです。トリエンナーレ以外の期間も見学できます。これから秋の棚田もいいですよ。



鞍掛純一+日本大学芸術学部彫刻コース有志《脱皮する家》2006年 述べ3千人によって、壁や床、柱などが彫刻刀で彫られ、一棟丸ごとが作品となった。



11



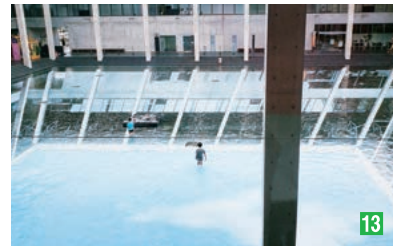
10



14



12



13

1 奴奈川キャンパス 廃校を活用して地域の生活を学ぶユニークな学校。キャンパス内外には作品も展示されている。 2 鞍掛純一《はなするべ》2018年 3 4 マ・ヤンソン/MADアーキテクト《ライトケープ》2018年 観光名所「清津峡」トンネルの絶景を望む見晴所の作品。清津峡の景観を反転して映す『水盤鏡』の幻想的な眺めが大人気! 5 金氏徹平《SF Summer Fiction》2018年 6 星峠の棚田 7 草間彌生《花咲ける妻有》2003年 8 イリヤ&エミリア・カバコフ《棚田》2000年 稲作の情景を詠んだテキストと、対岸の棚田に農作業する人々の彫刻を配置した、詩と風景と彫刻が融合した作品。 9 ジミー・リャオ(幾米)《Kiss&Goodbye》2015年 台湾のベストセラー絵本作家がJR飯山線を舞台に制作した絵本『幸せのきつぷ』から展開した作品。 10 鉢&田島征三 絵本と木の実の美術館 2009年~ 130年の歴史に幕を下ろした真田小学校を作家田島征三による「空間絵本」として再生した美術館。最後の在校生3人を主人公に、奇想天外な物語が展開する絵本「学校は終わらない」の世界を表現している。 11 須佐美彩《考えない》2018年 12 13 レアンドロ・エルリッヒ《Palimpsest》2018年 建物中央にある回廊に囲まれた大きな池は、2階から見ると建物の鏡像が複層化している不思議な現象に気づく。 14 カールステン・ヘラー《Rolling Cylinder, 2012》

初日はミシュラン星付きシェフ監修によるスペシャルランチに舌鼓をうち、2日目は、お米のあれこれを「ずおこめショー」で学んで、お気に入りのおにぎりと旬の食材をふんだんに使った惣菜を味わうなど、地域の食文化も体験できました。

また、美術研修を23年間に亘って講師として支えてくださっている美術研究家の沼辺信一先生と、大地の芸術祭で多くの話題作を手がけておられる日本大学芸術学部教授の鞍掛純一先生のお二人によるお話は、今回の研修のもうひとつのハイライトともいえるべきものでした。(コラム参照、鞍掛先生のプロフィールインタビューは12頁)